

チェルノブイリから 25 年、そして福島、
友情の絆が、一段と強くなることを祈念して…。

チェルノブイリ原発事故から 25 周年を迎えるこの日を、皆さまとともに過ごすため、日本からまいりました。

処理作業や事故の影響により、お亡くなりになられた方々、そして今なお病気などで苦しんでいらっしゃる方々にお見舞い申し上げます。

今回の訪問の目的は、皆さま方との友好をさらに深めることです。去る 3 月 11 日、日本で「東日本大震災」が発生し、更に津波の影響で「福島第一原発」が放射能漏れを伴う大惨事を引き起こしました。

私たち「救援・中部」の仲間達は皆、言葉では言い表せないショックを受けています。ウクライナの皆さまが、25 年間体験してきた茨の道を、日本もまた歩み始めることになってしまった事、20 年に渡る活動では防ぐことができなかったこと…。何度もウクライナの悲劇を伝え、日本の人々に警鐘を鳴らしてきましたが、結局は失敗に終わりました。

茫然と立ちすくむ私たちに、ジトーミルから届けられた、たくさんの友人からのメッセージに、心から感謝申し上げます。20 年以上にわたる私たちの救援活動、とりわけ最新 5 年間の「菜の花プロジェクト」が日本でも注目を集めています。原発に頼ることのない持続可能な社会を目指すとともに、再びウクライナの大地を、そして日本の大地を蘇らせ、人々が笑顔を取り戻し、将来に夢と希望を持って暮らすことができるようになるまで、私たちの活動が終わることはありません。

ともに苦しみと目標を共有化することになった、ウクライナと日本。あなた方と私たちがともに手を取り合い、両者の友情の絆が一段と強くなることを祈念して、ご挨拶に代えさせていただきます。

チェルノブイリ救援・中部を代表して 神野美知江



〒466-0064 名古屋市昭和区鶴舞3-8-10 愛知労働文化センター 地下1階

NPO 法人 チェルノブイリ救援・中部

銀行名：三菱東京UFJ銀行 名古屋営業部(店番号150)

口座番号：普通 6949211

口座名義：特定非営利活動法人チェルノブイリ救援中部 理事長 小牧 崇

郵便振替：00880-7-108610

TEL / Fax: 052-732-7172(月・水・金 10:00 ~ 17:00)

ホームページ：<http://www.chernobyl-chubu-jp.org>

<4月訪問 滞在報告>

神野美知江

* 4月20日(水) 今回の訪問は、主に藤井絢子さんとの二人旅。たくさん経験と実話を聞きながら、ヘルシンキへ向かう。また、福島原発事故後の放射能除染について、急遽、農水省関係者の参加申し出を受け入れた。準備した資料を見せ、私達の「菜の花プロジェクト」を説明。

* 4月21日(木) 晴天に恵まれ、地下鉄でキエフ市内へ。「黄金の門」「ソフィア寺院」「ミカエル修道院」と、若い学生や小学生も熱心に観ている「チェルノブイリ博物館」を見学。夕刻、タクシーでジトーミルへ向かう。

* 4月22日(金) コーリャさん運転のガゼールでナロジチへ。

① おひさま幼稚園:「草の根支援」で改修された建物と備品を確認。

② ナロジチ地区中央病院:大竹財団の交付金完了報告書提出の報告と、2011年度の資金使途についての話し合い。6月末までに見積りを取り、7月には振り込みを行う。副院長は4月15日付けで院長に昇格。職員に福島への募金を呼び掛け、7,633グリヴナものカンパを集めた。

③ ナロジチ消防署:今も被曝の危険を顧みず、消火活動を行う署員を訪問。

④ ナロジチ地区行政庁:篠原副大臣一行・農水省関係者6名・マスコミ4社が集合。庁舎内の会議室で、行政長と副大臣の挨拶・Q&Aを行う。その後、マスコミや農水関係者の「菜の花が咲いているのでは…」という大きな期待を胸に、畑へ向かう。

⑤ 菜の花畑:実はまだ「葉っぱ畑」のためビジュアル的にはイマイチ。副大臣も少しがっかり。

⑥ BG&BDFプラント視察:竹内さんによる状況説明のあと、副大臣からのQ&Aとマスコミ取材。

今年3月で終了する「一坪キャンペーン」賛同者のプレート(P13の写真)は、菜の花が咲く畑を背景に写真を撮り、その後BDF建屋内に掲示する予定。

* 4月23日(土) 30キロゲート前で副大臣と待ち合わせ。チェルノブイリ市内でガイドによるレクチャー後、10キロ圏内の視察。事故当時に作業に使われた装甲車、プリピャチ川に放置された船など、今までに数回訪問したが、見たことが無い遺物を見学。高層アパート内にも立ち入って見学できたが、現在は崩壊の恐れがあり、立ち入り禁止になっている。

* 4月24日(日/復活祭) アントニューク氏・孫(3歳)と娘婿が運転する車で自宅へ。アントニューク氏は、すっかりおじいちゃんになった。親しい友人が集い、復活祭のお祝い。

* 4月25日(月/代休) ホステージ基金事務所で、子どもの頃「チェルノブイリの被災者へ」と折鶴が届いたことを覚えていた女性が、福島の被災者へのお返しにと、小物と手作りのカードを届けてくれる。その後、ジトーミル25番学校の「グローバルアウェイアネス(ボランティアサークル)」の10~12歳の子ども達が、メッセージを書いた手紙を手に来訪。

① 福島への募金:152,000グリヴナ(約155万円)が集まった。測定器購入に充てる。

② 測定器製作会社:日本への測定器発送は8月頃。

③ サレジオ小学校からの寄付金:おひさま幼稚園は「ボールプール」などの遊具を揃えたい。

④ 児童画展の表彰式:幼年~高学年の3名にスケッチブックと絵具を贈る。



<プリピャチ川の橋の上で
(藤井絢子さん(左)、篠原農水副大臣
(中央)と)>



<農水省ご一行様と記念撮影>

* 4月26日(火)「25周年祈念式典」

ジトーミル消防署前の会場でメッセージを読む(P1参照)。終了後、ジトーミル農業生態学大学会議室で、農水省関係者6名のQ&A。今回は日本側とウクライナ側の顔合わせとし、今後の情報交換に期待する事となった。

* 4月27日(水)

ボリスポリ空港ロビーで、見知らぬ男性から「日本人か? 福島の復興を応援しているよ!」と声を掛けられ、嬉しくなる。



ナロジチとフクシマをつなぎたい

NPO 法人 菜の花プロジェクトネットワーク 代表 藤井絢子

「チェルノブイリ原発事故で汚染された地で、菜の花プロジェクト計画を進めています」と戸村京子さんからお聞きしたのは、確か京都大学で開催された「アラル海報告会」での事でした。ウクライナで最も大きな被害を受けた地区の一つ、ナロジチ地区の農地リハビリテーションプログラム「ナロジチ再生・菜の花プロジェクト」のシナリオを伺った途端、「いつかチェルノブイリを訪問したい」と心に残りました。

時が経ち 2009 年 8 月、精華大学で開催された、チェル救の現地パートナーであるジトーミル国立農業生態学大学准教授 M・ディードゥフ氏の「ナロジチ菜の花プロジェクト」講演会は、実に印象に残るものでした。2011 年はチェルノブイリ事故から 25 年、「ナロジチ再生・菜の花プロジェクト」もいよいよ仕上げの年になる。「是非、今年はチェルノブイリに」と決めていました。

そこに、まさかの東日本大震災・福島第一原発事故！“ともかく河田さんが超多忙になり、スタディーツアーは中止せざるをえません”と、チェル救から連絡を受けた時のショックはかなりのものでした。私たちのネットワークが展開してきた今までのコンセプトに、新たなカタチをつけ加える可能性がある。チェル救と菜の花プロジェクトネットワークが連携する事で、今起きている原発被災地で、何らかの役目が果たせるかもしれない。様々なメディアを通し、飯舘村の菅野村長が“菜の花で農地の再生を”と熱く語ってもらした。救いの電話がチェル救から入ったのは、悶々とした日々を過ごしていた時でした。“25 周年の祈念式に、代表団はどうしても行かなければなりません。スタディーツアーは中止しますが、この代表団と同行参加は如何でしょうか？”

即答です。“行かせてください！”それからが大騒動。河田さんのレクチャーを受け、現状の把握と事前学習を積み、訪ウが 13 回目の神野さんとの「二人旅」のはずが、結果的には篠原孝農水副大臣・農水省の土壤の専門家等事務方も同行して、チェルノブイリ入りとなったのでした。「菜の花プロジェクトネットワーク」は、運動の広がりの中、全国各地で「菜の花議員連盟」の政治家を含む、国会議員・各省の官僚・専門家・都道府県・市町村職員・議員等と連携を図って来ており、“混成部隊”には違和感はありませんが、チェル救は NGO の誇りで、行政や政治家と距離をもち活動しているようで、かなりとまどいがあったのでは、と推察しています。

結果的には、25 周年祈念の国際会議に続く科学者会議に、篠原副大臣・事務方が参加した事により、原発被災土壌再生のための情報を、参加国・機関との人間関係を通じて、多くいただける事になったとも伺っています。チェル救とディードゥフ氏を中心とする現地の方々の実践の場に立ち、また「ナロジチ再生・菜の花プロジェクト」の土壌分析にあたっているジトーミル国立農業生態学大学での議論・実験室訪問などを通じ、チェルノブイリの経験に学び、これを日本の今にどう生かすか、各々の立場での戦略をつくらねばと語り続けました。

事故から 19 年後にスタートした「ナロジチ再生・菜の花プロジェクト」と、現在進行形の“フクシマ”では、様々な違いもあるでしょう。それをキチンと整理した上で、秋には菜の花のタネが蒔けたら、と切望しています。土壤の専門家は、拙速は避けたいでしょうが、再生の一つのカタチが“フクシマ”で始まる。そして、これが日本の再生につながる事を見せたい。世界の国々に対して、最大の加害者となってしまったこの国が、3 月 11 日を境に生まれ変わる決意の表現としても…。チェル救の長年にわたる実践は、私たちに勇気を与えてくれています。ナロジチの人たちが、自分たちの力で「五年間の社会実験」を真の農地の再生にもっていくには、まだ長い時間がかかるでしょう。でも道筋は見えてきました。“フクシマの”道筋をつくる為に、連携の力を高められたら、と願っています。

総会&チェル救デーのご案内



■日時 6月18日(土)午後1時~4時

■場所 愛知労働文化センター 4F

(チェル救事務所のあるビル/JR中央線・地下鉄鶴舞線「鶴舞」下車徒歩10分)

【第1部】2011年度 定期総会

【第2部】福島最新報告

【第3部】茶話会

東日本大震災より、はや3ヶ月。チェル救では、新たな放射能汚染との戦いが始まりました。チェル救が今まで培ってきたノウハウをお伝えするため、ホームページの充実、講演などで大忙しのなか、総会を迎えることになりました。

すでに福島訪問は3回を重ね、「支援の絆さがし」を模索しています。皆様には、てんやわんやの裏話や、ナロジチの菜の花プロジェクトの動向も織り交ぜ、お伝えしたいこと満載です。

また会場は、昨年移転した事務所と同じビルですので、ぜひ総会後は事務所にもお立ち寄りください。皆様のご来場をお待ちしています。

(市原)

小さなお話し会…世代を超えて

4年前、私が暮らす伊那で鎌仲さんの映画「六ヶ所村ラブソディ」の上映会を行った。その時親しくなった仲間に、都会から移り住んで間もない若いお母さんがいる。4月に入って、「原発事故について、インターネットの情報は便利ではあるけれど、やはり直接顔と顔を合わせて話をするのが大事だと思う。仲間に声をかけて学習会を開きたいので、そこで話をしてくれないか」と彼女から依頼され、気楽に引き受けた。暫くして、彼女のブログに「小さなお話し会を開きます」と紹介記事が載った。チラシを作ったわけでもなく、宣伝はそれだけ。会の前日に、電話で打ち合わせた際も、10名になるか20名になるか全く見当がつかないとのこと。「時期が時期なので、余裕を持って資料は30部用意しましょう」と確認しあったのだが…、当日は予想をはるかに上回る80名あまりが来場。にわか仕立てのスタッフは、資料の増し刷りや受付にてんてこ舞い。子連れのお母さんも多く会場は賑やかではあったが、まとまりのない私の話を熱心に聞いてくれ、終了後、質問が次々と出た(冷や汗!)。多くの皆さんが、原発事故に対する不安を抱いているのだという実感と、若い世代を中心としたネットの動員力に圧倒されたのであった。

その後も、何回か学習会に呼ばれた。赤ちゃんの泣き声や小さな子どもが走り回る会場を見渡して、二十数年前、子連れで原発学習会に参加した記憶が、懐かしくよみがえった。話の冒頭には、「現地の人は汚染されたキノコや野菜を食べ続け、体内にセシウム137を500~5万ベクレルぐらい持っている。しかし、何ら疾患が増えたという事実は確認されていない(長崎大 Y氏談)」という新聞記事を、必ず紹介することになっている。

チェルノブイリから何も学ばない人々の言動によって、フクシマの被害は確実に広がっている。(小牧)



歴史に残るであろう2011年3月11日から2ヶ月が過ぎた。未だに遺体も発見できない被災者のご家族の思いをどのように歴史に残すべきか。地震と津波に加えて原発崩壊がもたらした出来事の重さをどのように後世に伝え、3度目のチェルノブイリを起こさないために何をすべきか、世界中が深く考えなければならない。福島原発震災は、「原発の持つ本質的な暗部を暴き出した」と言って良い。

● レベル7の意味

当初は炉心崩壊の程度を軽く見ていた政府と東京電力も、「地震発生からわずか16時間後の3月12日午前7時頃には殆どの燃料が溶融しメルトダウンしていた」と発表せざるを得なかったが、それは事故から2ヶ月以上たった5月15日である。如何に政府と東電、関係専門家の見通しが甘かったか、の証拠である。この事実は、これまで原発を推進してきた「原子力村」といわれる「政官財学の住民達」の甘えを打ち砕き、核利用の持つ本質的な危険性をあらわにした、といえる。「核兵器は駄目だが、平和利用はよし」とする、戦後の原子力政策を、根本から見なおさなければならない。そもそも、原発の燃料ウランは、石油と同じく化石燃料であり、60年後には廃棄物だけを残して終る運命にある。既にこの欄でも度々書いたが、核燃料再処理と高速増殖炉をセットにした「核燃料サイクル」の幻想が、原発をここまで普及させてきたのである。

● 事故は廃炉の時代の先取り

20km圏内には、津波による大量の瓦礫があるが、放射能汚染で簡単には処理できない。また、各地の下水処理場の汚泥には、1kg当り数万ベクレルのセシウム汚染が生じており、政府はこれを当面処理場内に置き、将来はこうした汚染瓦礫や汚染汚泥を焼却して、焼却灰をセメント原料にする考え、と言われる。こうした状況は、これまで政府が進めてきた「将来の廃炉原発で生じる膨大な汚染ゴミを、放射能レベルで裾切りし、一定レベル以下のものは一般ゴミとして再利用する」という戦略の先取りともいえる。本格的な廃炉の時代が来れば、今回の事故がなくても我々はいずれ、汚染したコンクリートや鉄骨で出来たビルに住み、放射能入りの机や椅子を使い、汚染したナベで調理する、そんな世界を迎えるはずだった。それを、我々は今から体現しようとしているのである。汚染した土壌で採れた野菜をたべ、汚染した環境で暮らす、これもまた原子力の未来である。原子力利用がもたらすこうした未来図に我々

はこれまで目を塞いできただけである。「放射能は、それ自身が持つ物理的な特性、半減期によってしか減らない」という、冷厳な事実を改めて知る。「高レベル放射性廃棄物を10万年間安全に管理できる」という傲慢な意見を誰が信じるだろうか。

● 浜岡5号の怪事故

福島原発震災より先に来ると云われていた東海地震であった。政府による浜岡停止は、津波対策など当面の措置に過ぎない。しかも、停止した浜岡5号で新たな事実が発覚した。「停止後に、压力容器内に大量の海水が流入していた」というのである。これは何を意味するのか。海水流入の経路は、炉心冷却用の復水器と呼ばれる巨大な熱交換器しかない。原因は、復水器内の主蒸気配管が海水循環配管が地震動で破れ、あるいは溶接部にひび割れなどが生じ、原子炉停止後に炉心圧力が下がった結果、復水器の中の海水が主蒸気管に流入した、としか考えられない。このことは、原子炉停止前の压力容器内の圧力が高い間は、同じ穴から放射能で汚染した水が大量に海に流出していた可能性を意味する。恐らく、津波がなくても浜岡5号は地震動で壊れていたのである。予想される直下型東海地震に、浜岡原発は堪えられないだろう。

● 脱原発の津波を一刻も早く作ろう

最早、躊躇している時間はない。世界に目を開けば、持続可能エネルギー分野で日本は遅れている。石油業界や原子力業界が牛耳ってきた日本のエネルギー政策を、根本から変える時である。バイオエネルギーなどの「持続可能で地域分散型のエネルギー技術」は既に確立しており、それを採用できるシステム作りこそ急務である。電力の自由化を進めよう。一人一人が、自らの意思で使うエネルギーを選択できる権利が、必要である。地域が、自らの意思で電源を決定し、発電所を建設できる体制作りが必要である。同時に電力の無駄使いを進める産業からの撤退を、急がなければならない。(河田)

『自然災害と原子力災害に見舞われた 日本の皆様へのメッセージ』

チェルノブイリ被災者互助団体「ゼムリヤキ(同郷人)」
(キエフ市。プリピャチ市からの避難民による市民団体)

親愛なる日本の友人の皆様！

私は、将来このような素晴らしい人々とお知り合いになれる機会を得られるかもしれないことを、神にとっても感謝します。

すべてのチェルノブイリ被災者は、深く皆様に思いを寄せています。

なぜなら、私たちは皆様と分かちがたい関係にあるからです。

あなた方とともにある“ゼムリヤキ”は、遠い彼方から心を寄せているのではなく、私たちはひとつの同じ地球にともに住んでいるのです。

ヒロシマとナガサキ、チェルノブイリとフクシマは、長い年月にわたり影響を及ぼす核の悲劇です。そして私たちはあなた方とともに、この大災害の証人であり、犠牲者なのです。

この重い課題は、地球上の人類が教えたのではなく、自分たちの行為のもとに意図されたものであり、また自然界の法則に干渉してはならないことです。なぜなら、私たちは自然に逆らって無力であることを感じたからです。

私たちは、家族を失くし自分の家を失った人々に対し、深く同情いたします。一瞬のうちに全てを失ってしまったことを知っています。この倫理的・心理的なトラウマは、早い年月に痛み出すでしょう。そしてあなた方は、子ども達や次の世代への深刻な心配をすることになるでしょう。

あなた自身は、保障と絶望感に対して取り組まねばならないでしょう。なぜならあなた方には、別のいろいろな問題に取り組むことがあるからです。あなた方は、忍耐強い民族です。私は、あなた方が困難なときを乗り越えることができると信じています。

私たち“ゼムリヤキ”は、あなた方を春の太陽が暖め、緑の葉や小鳥のさえずりが喜ばせることを望んでいます。どの家族にも、子ども達の笑い声が響き、すべての皆様のご健康でお幸せになることをお祈りします。

私たちは、毎日あなた方のためにお祈りします。

そして希望を持ちましょう。

私たちを見守る神様のご加護がありますように。

2011年4月24日
「ゼムリヤキ」代表
タマーラ・クラシツカヤ



特集!!

福島原発事故の被害調査と支援活動の予備調査（第一次）4.18～4.21

【4月18日（夜）名古屋の事務所を出発】

福島第一原発の事故による、被災地・被災者への救援活動を開始するべく、チェル救メンバーは、福島県へ事前調査に出かけました。

4月18日20:30に、レンタカーで名古屋を出発（神谷・池田・河田・戸村）、長野経由で伊那メンバー（原夫妻）と合流し、19日早朝に福島県に到着しました。

昼に、鉄道移動メンバー（山盛）を含む総勢7名が、各所で「放射能測定」「現地講演会（2回）」「行政機関（南相馬市・川俣町）との面談」等を行いました。



<土壌の放射能を測定する>

【4月19日（午前）放射能測定】

車で移動中、郡山市を通過したところから、持参した数台の放射能測定器のカウント音が、次第に高く鳴り出したので、東北自動車道と磐越自動車道が交差してすぐの「安達太良サービスエリア」で下車、放射線量を測定しました。地表で $4.84 \mu\text{Sv}$ （マイクロシーベルト）、1mの高さで $1.49 \mu\text{Sv}$ という高い値で、これまでウクライナのチェルノブイリ原発事故被災地（原発エリア内やナロジチ地区）に何度も行っているメンバーたちですが、一同、今回の福島原発事故の大きさを実感しました。菜の花プロジェクトを実施するナロジチの畑でも、 $0.6 \mu\text{Sv}$ 程度であり、この $4.84 \mu\text{Sv}$ の値は、現在のチェルノブイリ原発30キロ圏と同じレベルです。

19日朝、福島市の小林富久壽さん（元福島民報記者のフリーライター。20日の講演会の主催者）の車と合流し、午前中は南相馬市へ向けて車で走行しながら、放射線量の測定をしました。途中、阿武隈高地の中山間地にある飯館村では、伝えられていたように、山あいの道路沿いの値は高く、測定器が鳴り響きました。南相馬市でも所々で測定しましたが、市内北部はさほど高くはありませんでした。

【南相馬市長と面談】

9:30に南相馬市役所に着き、少なからぬ住民に市職員が対応する忙しい動きの中、あらかじめアポが取れていた桜井勝延市長と面談しました。「南相馬市の人口は71,000人だが、水素爆発が起きて住人が自主的に退避し、一時は10,000人しか残っていない。今は半数の35,000人に戻っている。しかし、宅配も新聞も郵便も来ない。マスコミも去り、電話取材だけ。スーパーも閉じ、物資が入らなくて困っている。銀行は強く要望して再開したが、社会的インフラがズタズタになってしまった。」と窮状を訴えられました。また桜井市長は、東電・国の原発政策について、「これまで原子力防災はゼロに等しい。住民生活より首都圏の経済が優先された。住民の生命と暮らしを最優先にしてもらいたい。」と、原発・震災の深刻な被害の中にあって、住民を守るために、政治への抗議と要望を冷静沈着な物腰で話されたのが印象的でした。



<南相馬桜井市長との面談>

その後、秘書課の星さんから、「市内の水田面積の3割が津波の被害を受けている」「避難住民は全国300ヶ所に、さらに親戚等1,000ヶ所へ分散している」「市の職員は、自らも家や家族を失った被災者であっても、多くの被災者の対応に追われ、精神的・肉体的に疲労している」「ボランティア・マンパワーが必要」などのお話をお聞きました。

チェル救のこれまでの活動や「菜の花プロジェクト」の経験から、何か役に立てることがないかを尋ね、放射能汚染マップ作りへの協力など

を提案しました。「詳細は、今後の相談を重ねて」ということになりました。

【講演会】@飯坂温泉(主催:福島・未来塾すばる)

「よみがえれ福島・命めぐる大地…今、聞きたい！ 放射線防護と農地再生・菜の花プロジェクト」

福島原発震災以後、チェル救事務所には、事故による放射能の影響を心配する人々から、多くの問い合わせがあり、福島市で梨や桃などの果樹園を営む大内果樹園から、河田さんの講演会を依頼されました。会場は飯坂温泉の大きな旅館で、広い会議室はみるみる参加者でいっぱいになり、イスを何度足しても足りなくなる盛況で、約300名の参加者であふれました。

会場には、大内さんご夫妻を始めとした、有機農業の生産者が多く参集されていました。参加者の皆さんは、河田さんによるナロジチでの「菜の花プロジェクト」(汚染地再生・復興の報告)を熱心に聞かれ、翻って、現在の福島原発の放射能汚染による農業への影響、食の未来を案じ、公式の放射能値の発表に対し、実際はどうか等の活発な質問が次々と出されました。

「自分たち一人ひとりが、この原発震災の被害に立ち向かおう」という参加者の呼びかけなど、会場には放射能汚染問題の切実さと、実態を知りたいという熱気であふれました。



〈河田さんの講演会@飯坂温泉〉

【4月20日(午前) 相馬市の津波被害地へ】

午後の福島市内での講演会の前に、伊達市を通るルートで相馬市の海岸方面へ、震災と津波の被害調査に行きました。その間、車中や下車して、各所で放射線量測定を続けていきました。やはり、福島原発から北西方向は値が高く、途中の霊山(りょうぜん)の山あいでは、前夜来降った雪の上でも2.34 μ Svを示し、放射能雲が通り、山に当たって地面に落ちたホットスポットと思われました。

その後相馬市に入り、測定器の値は下がっていきました。しかし、海が近づくにつれ、テレビの映像で見たあの津波被害の光景が広がり、一同、あまりの凄さに言葉を失いました。松川浦の漁港はコンクリートの岸壁も流され、漁港の跡とわかる破壊された建物、流された巨大な重油タンク、陸に打ち上げられた船、船…。魚の生臭さと油の入り混じった臭いが、打ち寄せる波と風に運ばれてきていました。



〈南相馬の津波被害〉

海岸沿いに南下して南相馬市方面へ行くと、海側の広い田園は津波に洗われ黒ずみ、海の波消しブロックが、広い田んぼの中にゴロゴロ転がっている風景は、非現実的な世界でした。出会った人から、「あそこら辺には家もあったんだげど…」と聞き、かつてそこにあった人々の生活を思いました。

【川俣町長と面談】

福島市へ戻る途中に、飯館村の隣にある川俣町役場へ行き、古川町長と面会し、町の実情や今後の支援の可能性について懇談しました。ここでも、地区により高濃度の汚染地があり、住民の避難について頭を悩ませているとのこと。役場内には、学校や公民館など、地区毎の測定値が大きく掲示されていました。「この時季は山菜のシーズンで、例年は人びとが山に入るが、今年は採れない」と、春の訪れを楽しみにしていた人々の嘆きが聞かれました。

【講演会】@福島市(主催:日本一のふるさとを創る会)

講演会は前日同様に超満員で、子育て中の若い世代や女性など、一般市民が多く参加されていました。福島市では1.85 μ Svなど、30キロ圏の南相馬市の北部よりも放射能値が高く、学校・幼稚園のグラウンドの汚染が、若い父母の心配事でした。「『甲子園へ行きたい』と練習に励む子どもの夢をあきらめさせても、他所へ避難すべきか?」と悩む、多くの親たちの姿が痛々しくありました。市民グループの人たちは、子どもの基準を20ミリシーベルト

／年にされたことに抗議し、自分たちで測定し、教育委員会や国に進言する活動を始めていました。

【4月21日(午前) 大内果樹園の土をはがす】

前日の講演会でも大きな関心の的となっていた、「学校・幼稚園のグラウンドの表土剥離をしてみてもどうか」という相談を大内さんにしたところ、学校に提案して下さることになりました。



〈大内さんと土壌剥離の相談〉

大内さんの果樹園を訪問して、試しに梨園の草の生えた地面を測定し、その後、草を剥がしたところの測定値は約半分に下がり、その効果がよくわかりました。この訪問時には、福島県は桜の咲いている時季であり、まだ梨の木は芽を出しておらず、葉からの吸収はありません。

「今年の梨は大丈夫」と、大内さんご夫妻はじめ、皆で胸をなでおろしました。

【同日(午後) 帰路、名古屋へ】

福島の現地へ足を運び、岩手県・宮城県の地震・津波の自然災害の被害と、福島県原発震災による被害は、まったく「別のもの」と再確認しました。福島では、多くの家は屋根の瓦が落ちているものの、ほとんど壊れておらず、町は一見普通でした。野山も田畑も、もちろん見た目は変わらず、桜が咲き、杏が、チューリップが咲いていました。しかし福島でも、チェルノブイリ事故と同様に放射能は風に乗る、雨や雪によって地面に落ち、まだらに(スポット状に)汚染されていることが、実際に自分達で測定してみてもよくわかりました。私たちが、これまで22年間チェルノブイリで見聞きたことが、現実には福島でも起こってしまっていたのです。

これから、長い放射能との戦いが始まります。しかし、私たちがウクライナで経験してきたことを、この福島で何か役立てられないか、ウクライナの被災者を支援し学んだことを、少しでも福島の被害者支援で活かすことができないか、日本に、いや世界中に原発がある限り、第2、第3の「チェルノブイリ・フクシマ」が起きるだろう。私たちの価値観やライフスタイルを根本から見直し、再生可能エネルギーによる持続可能な世界にしていきたい。このようなことを質問し、話し合いながら、夜、名古屋に帰ってきました。(戸村・山盛)

福島原発事故・第二次調査 5.16～5.17(神谷・原・河田・池田の4名が参加)

【16日12時半ごろ～14時半 わんわん学童保育所を訪問】

電話で問い合わせがあり、訪問した。子どもの人数は1日あたり12～13名で、木造の民家を保育に使っている。河野理事長、指導員5～7名と話し合い。

河野理事長から、5月5日に県が保育所の放射線量を測定した結果の説明と、その資料をいただく。河田さんを中心に、測定結果を説明した。今後の取り組みについて話し合う。庭は放射線量が高いが、半分は人工芝が敷いてあり、これを剥がして新しく人工芝を敷き直してはどうかなど、具体的な対応策が見つかる。指導員の方々から、「子ども達を外に連れて行ってよいか、砂場で遊んでよいか」など、具体的な心配事の質問を受け、「粉じんがひどい場合は、吸い込むことによる内部被曝の危険が高く注意が必要」など、河田さんが回答した。

実際に、河田さんの持参した測定器で保育所の各所を測定すると、「部屋の中心部は低く庭に近い窓際は高い」「縁の下のある縁側は高い」「庭は高く、特に雨どいの下は高い」「人工芝を剥がすと、放射線量は半分以下になる」など、状況が具体的に分かり、保育所の皆さんもどうしたらよいのか方向が見えたようで、ホッとされていた様子だった。

【斎藤さんの果樹園に移動、15時ごろ着】

斎藤さんの果樹園(桃の栽培/平地)に行き、放射線量を測定した。桃の木の間は、草で覆われている(原発事故後一度刈った後に生えた



〈表層を剥ぎ取れば…〉

もの)。ほぼ一面にわたって $3\mu\text{Sv/h}$ 。土壌剥離の方法等を相談する。別の果樹園(リンゴの栽培/斜面)に行つて、放射線量を測定。斜面の中腹で $3\mu\text{Sv/h}$ 、下の方は $2\mu\text{Sv/h}$ 。雨で、斜面上部の放射性物質(主にセシウム 137)が、下部に流されることはなさそう(斎藤さんから「土壌剥離を実施したい」旨の連絡が、翌日入)。

【17時～19時 ふくろうの会・中手さんたちと話し合い(15名超)福島ILセンター】

参加された皆さんから、状況説明や質問があり、それに河田さんが答える。畑・鶏舎・校庭・保育園など、具体的に測定した放射線量を交えながら、状況の説明。校庭の表土剥離をしようとしても、先生の協力が得られない。また、父兄の中にも「安全と言われているから良いのでは…」という人もいるなど、なかなか行動につながらない状況という。子どもを守るネットワークが4チームを編成して、学校・幼稚園の放射線量測定や除染の活動を始めた…との報告。河田さんからは、ライフスタイル毎の放射線量の測定や、食品の測定を行えるようにしようと思つていることなどを説明した。

【19時～21時 夕食交流会(大内さんの呼びかけで、自然食のお店で20名ほど参加)】

一人ひとり自己紹介しながら、それぞれの状況や思いが語られた。飯館村・川俣町・いわき市・郡山市からも参加。「放射線の恐さを、周りの人々になかなか分かってもらえない苦労がある」「専門家によって言うことが異なり、どこを拠り所にしてよいか困る」などの発言があった。

ILセンター・交流会ともに、具体的な活動の話にはならなかったが、今後、この会をきっかけに具体的な話が出る可能性もある。

【17日(火) 南相馬市役所へ】

7時45分ホテル出発、川俣町・飯館村を通り(途中、菜の花畑と牛舎で測定をしながら)、10時～11時 南相馬市役所秘書課の星さんと打合せ。

「『放射線測定隊』を編成して、南相馬市の各所の放射線量測定を行いたい」との説明をしたところ、星さんがすすんで相談に乗ってくれ、学校の住所一覧・諸施設一覧・地図を提供して下さる。そして、環境課の担当者と連携を取りながら、6月から測定を行うことになる。南相馬市では、「測定器1台を使って車で巡回して、決められたポイントでの放射線量測定を始めた」との説明もあり、データをもらう。

なお、郵便や宅配は行われるようになり、スーパーや書店も営業を始めたところも出てきたとのこと。ただし「30km圏内の学校は閉鎖し、30km圏外の鹿島区および市外の学校を借りるなどして、授業を始めている」「30km圏内の病院は、入院を認められていない」など、まだまだ厳しい状況にあるとのことだった。

【14時頃 三春町の民家へ】(河田さん紹介:今は空き家で測定隊の宿泊所に使えないかを視察)

部屋数および広さは十分で、10人程度はラクに泊まれそう。このあたりの汚染レベルは低く、家の周りで $0.45\mu\text{Sv/h}$ 、部屋の中(玄関)は $0.25\mu\text{Sv/h}$ であった。(池田)

チェルノブイリ 25 周年救援企画

チェルノブイリ 25 周年救援企画を終えて(西部理恵)

企画を終えて、ホッとすると同時に、今改めて原発事故の情報が切に求められていると痛感しています。

3月11日、東日本大震災が発生、同時に原発事故の様子が次々と報道されました。日本で起こってしまった原発事故。当日は、予想以上の来場者に、関心の高さを思い知らされました。こうした中、広河氏・神野氏・そして急ぎよ講演していただけることになった河田氏を迎えられたのは、大変素晴らしいことでした。事故直後のチェルノブイリと、フクシマを対比した広河氏。写真という視覚的な媒体によって、フクシマが正にチェルノブイリと同じ道を歩もうとしているという現実を、説得力を持って伝えてくれました。「必要以上に怖がらせてはいけない」と言われますが、必要な情報が何もない状況では、自らの行動を選択することすらできません。続く神野氏が冒頭に読まれた手紙は、たいへん印象的でした(1ページ参照)。支援者の方々から、逆に心配されたというあたりは、本当に胸が詰まりました。チェルノブイリとフクシマでは、“必要なこと”は同じようで違うということ。私たちは、チェルノブイリから「事故直後にすべきことは何か?」ということ、学び生かす時なのですね。現在のチェルノブイリでは「菜の花プロジェクト」が必要でも、フクシマでは「今なら他の方法で放射能の汚染を最小限に留められる」ということが、本当によく分かりました。その後の質疑応答でも、経験に基づく実際的な回答を得られて、貴重な情報提供の場になったのではないのでしょうか。



今回は、会場も混雑を極め、環境の良くない中にも関わらず、多くの方が熱心に話を聴いてくださいました。不慣れで至らない点多かったことと思いますが、皆さまのご協力を得て、何とかこの会を開催できたこと、この場を借りて感謝申し上げます。ありがとうございました。

来年もまた、覚えていてくれるのだろうか? (広河隆一写真展実行委員会 林 恒弘)

毎年この時期になるとやっている「チェルノブイリ救援企画」。今年は 25 周年だということで、いつもよりは派手目にやろうということで、準備を進めてきました。

25 年も経ち、さらには遠い異国の事故ともなれば、人々の意識にはほとんど残ることができません。でも、あの当時まき散らされた放射能は、彼の地に、そしてそこの人々の体の中に、今も残って悪さをし続けている。その当時に被曝した人々をまたぎ超えて、その子孫たちの身に襲いかかっているという現実、世間が忘れても決して消えて流れるということがない。このことを伝えていきたくったのです。しかし、この企画の本番を迎える直前、新たな現実が押し寄せてしまいました。東日本大震災が引き金を引いた、福島第一原発の炉心溶融事故。当初実行委員会で「もうちょっと派手目にやりたいねえ」と話し合っていた規模なんか、はるかに飛び越えてしまって、私たちの想定能力そのものを凌駕する反響でした。講演会では、立ち見どころか会場入り口から先に入ることさえできず、全く不本意ながら、いわゆる門前払い状態にまでなりました。写真展では、会期が 6 日間という幅もあって、入っていただけないということはなかったものの、平日・休日の別なく毎日 300 人以上の方においでいただきました。また来場者の中には、福島県から避難されてきたという方もあって、ことさら熱心に見入っておられたようです。

こうした思いもかけない反響を、素直に喜べばいいのかもしれませんが、メディアに踊らされ、迫ってきた出来事に視界を奪われ、あまりにも爆発的で急進的な展開、そこから短絡的な捉え方に偏ってしまうという風潮に、別の恐れさえ抱いてしまいます。「この人たちは、来年また覚えていて関心を傾けてくれるのだろうか」と、その熱狂を前に陰鬱な気持ちになったことも、正直な心象です。

「菜の花プロジェクト」は、日本を変えるだろうか？

チェルノブイリ 25 周年救援企画 in 名古屋にて

神野英樹

チェルノブイリ原発事故から 25 周年を迎えた今年、この日本(福島)で新たな大惨事が発生した。20 数年にわたり続けてきた活動の中で、私達は何度も何度も、日本の原発政策に対し警鐘を鳴らし続けて来たつもりであった。しかし、結果として、この努力はむなしく打ち砕かれてしまった。なぜ、事故を防ぐことができなかつたのか？ なぜ、原発政策を転換させることができなかつたのか？ 私達は自問自答している。恐らくそれは、私達のそして日本人の「情報リテラシー」(正しい情報の収集力・分析力・発信力)の弱さに起因していたのだと思う。福島第一原発事故の報道を再検証すれば、その一端を垣間見ることができる。

事故後、政府(各省庁)・東電・原子力安全保安院、そしてマスコミがたれ流してきた、ごまかしの情報を振り返ってみよう。

●事故後、現地視察した枝野官房長官・岡田幹事長の言動不一致

枝野官房長官ら政府の広報担当者は、「安全だ。万一を考えての予防処置だ。ただちに健康に影響を与えるような状況ではない…」などと安全宣言を繰り返しながら、自分達が現地を視察した時のいでたちは、まさに「完全防備」。枝野が車から出たのはわずか 5 分間。岡田にいたっては、完全防備の上、ゴム手袋をしたまま、普通の作業服を着て素手を差し出す現地の関係者と握手をした。自分たちの発言のうそを、自分たちの姿で暴露している。

●風評被害を恐れ、洗って測定・公表することにした厚労省と農水省

なんと、農水省が発表していたほうれん草などの放射線数値とは、厚労省の通達により、測定機関が水洗いした後に測定した「10 分の 1 程度に低い値」であった。これを知りつつマスコミは、「洗えば 10 分の 1 に低下するので食べても安全」と宣伝していた。これは政府・マスコミが一体となった悪質なサギ行為である。

●津波の高さ・地震の規模を変更した東電・気象庁

東電は、地震直後に発表していた 6~7m の津波高を、倍増して「14m の巨大津波だった」と変更した。しかし、福島第一原発の北方 42 km にある相馬市の最大記録は 7.3m、そして南方 58 km にあるいわき市小名浜の津波高は、3.3m であった。そのほぼ中間地点である福島第一原発の津波高が、なぜ 14m になるのか？ また、気象庁は今回の地震のエネルギーの大きさを示すマグニチュードを、発生当初の M7.9 から M8.4 に、そして第一原発 1 号機で水素爆発したことがわかると、突然に M8.8 に変更し、被害の深刻さが増すにつれ、M9.0 へと修正を重ねた。M8.4 から M9.0 への変更は、「モーメントマグニチュード」という基準に計算方法を変更したことによるものであり、これ自体はごまかしではないが、それまで変更しなかった理由、「過去の地震との一貫性」を放棄した上、今回のその基準を変更したことは、発表していない。

この津波高・マグニチュードという 2 つの記録の変更は、「想定外の未曾有の地震であった」と東電が責任ののれをするための印象操作である。

●事故 1 か月後に、突然安全基準を 20 倍にした文科省

今まで文科省は、累積放射線量の人工被曝年間許容量を、「1 ミリシーベルト/年」としていた。ところが、放射能汚染の実態が明らかになるにしたがって、1 か月後に突然「大人も子どもも 20 倍の 20 ミリシーベルト/年」に許容量を引き上げてしまった。子どもは大人よりも 3~10 倍、放射能の影響を受けやすいと考えられている。また今、問題となっているのは、地表に降り積もった放射能である。地面に近い空間で、遊び、生活する子ども達は、地表の放射線の影響をより強く受け、また呼吸による内部被曝の危険性も高まる。放射線を扱う大人の職業人を対象に設定された「上限 20 ミリシーベルト/年」という数値が、子ども達に許されてよいはずがない。



〈5月8日 現地視察をする岡田幹事長 (完全防備の人)〉

私達は、目を見開かなければならない。耳を研ぎ澄まさなければならぬ。そして、頭脳をフル回転させて、真実を発信しなければならぬ。それが「情報リテラシー」ということである。そうすれば、世界の仕組みが見えてくる。原発が必要だと主張する(利権に群がる)人間達のうそを見破る力が身についてくる。

もうひとつ、問題を提起しよう。

「地球温暖化防止のために、人工のCO₂を削減しなければならぬ。」「原発はCO₂を出さないクリーンなエネルギーである。」「地球温暖化防止のために原発を推進しよう。」「…誰もが信じて疑わなかった三段論法である。しかし、本当だろうか？

確かに、CO₂は温室効果ガスの1つである。しかし、温室効果ガスの主役は、実は水蒸気(80%~90%)なのである(CO₂は12~6%)。

しかも、人工のCO₂は、植物や動物や火山が放出する自然界のCO₂に比べればごくわずかであり、結局、人工のCO₂は温室効果ガス全体の数%以下である。「地球は、人間の排出する人工のCO₂の増加で温暖化しているのではない。(太陽の黒点の活動に関係しているという、デンマークのヘンリク・スベンスマルク説が有力)」…これが、世界の科学者たちの常識なのである。従って、原発が「地球温暖化防止」の救世主になることは絶対にありえない。是非あなたの「情報リテラシー」を深化させ、真実を見抜く目と耳と口を進化させていただきたい。だまされてはいけない。原発は無用なのである。

福島原発事故の後、一時期「菜の花革命」という言葉がインターネット上に出回っていた。菜の花が土壌の放射能を吸収してくれるのは事実である。チェルノブイリの汚染地ナロジチでは、効果を発揮してくれると期待している。しかし、今の日本(福島)では、その前にやらなければならないことが山積している。まずは、事故処理(終息)に全力を注ぐこと。次に、汚染の実態を正しく把握すること(政府の発表ではなく、独自の調査が必要)。それまでは、できるかぎり避難を優先させること。そして、汚染してしまった土地の浄化をすること(除染方法は、汚染された表土をはぎとることが優先されるべき)である。はぎとった汚染土は、もちろん東電にお返ししなければならない。

私達の「菜の花プロジェクト」には、残念ながら今すぐ日本を変える力はない。しかし、この福島第一原発の事故を機に、日本人一人ひとりが意識改革をし、「情報リテラシー」に目覚めるならば、その時初めて、「菜の花革命」という歴史の転換点が訪れるのである。

* * * * *

財政再建委員会からのお知らせ

- ① 寄付金のご報告: 1月は、239,000円(34件) 2月は、374,776円(56件) 3月は237,500円(46件) 4月は1,410,000円(153件)でした。ありがとうございます。4月以降は、福島原発被災支援・放射能測定器購入支援の費用指定が多く、4月寄付金の約40%に及んでいます。測定器は、今後の福島での活動に向け緊急手配中です。

「一坪キャンペーン」は、3月末にて終了いたしました(P2の「4月訪問 滞在報告」を参照してください)。4月以降も、数件の寄付金が寄せられました。それらの寄付金は「菜の花プロジェクト」の費目に繰り入れさせていただきました。ご了承ください。



＜一坪キャンペーン賛同者の
看板を掲げるディドゥフさん＞
(神谷)

竹内さんのウクライナ便り

「救援・中部」派遣団がウクライナから帰国した翌日の4月28日、ベルギー人のアラン・ダルー（？ 日本では「アラン・ドゥ・アルー」という表記になっているようですが、フランス語表記は Alain de Halleux）という人が撮影したドキュメンタリー映画、『チェルノブイリ 4（フォー）エヴァー』の入場無料初公開がキエフの「映画会館」（ソ連時代からある映画関係者用の施設）であり、私は観に行ってきました。

この上映についての情報は、京大原子力実験所の I さんと古い付き合いの、キエフの物理学者 T さんがメールで流してくれたものです。

会場の前には、ラフな服装の若者たちが 10 人ほどたむろして歓談しており、中には昔の日本のロックンローラーを思わせるような幅広のバンダナの人もいましたが、広いホールに入ると中は閑散としていました。それでも上映予定時間の 19:00 が過ぎる頃には、100 人くらいは入っていたでしょうか。15 分くらい遅れて、1957 年生まれの監督の挨拶（ロシア語通訳つきのフランス語）があり、上映が始まりました。いきなり 20 代初めくらいのご若い 4 人によるロックの演奏が鳴り響き、その情景と、ウクライナの若者が製作したチェルノブイリの立入制限区域を舞台とするコンピュータ・ゲームのグラフィック画面がスクリーン上で交錯。ロック・バンドが演奏する歌の題名が、どうやら映画のタイトルになっているらしいのですが、その 4 人はつい先ほど会場の入口で見かけたばかりの若者たちで、やがてドラマーの女の子がスクリーン上で語り始め・・・「あたしがこのゲームをやった時、パパに『リクヴィダートル（事故処理作業）って何？』って聞いたら、『そりゃ、俺たちみたいにチェルノブイリで事故処理作業をやった人らのことだ』って言われてびっくり・・・」、バンドのメンバーがチェルノブイリ原発やプリピャチを訪れる光景と、事故後 4 号炉内に入って写真を撮った事故処理作業員・石棺関連の文書を収集している歴史家・元最高会議チェルノブイリ問題委員会委員長らのインタビューが交互に映し出され、私にとっては特に目新しい情報が提供されたわけでは



く土壌の放射能除去について篠原農水副大臣に説明をするディードゥフ氏（ナロジチの菜の花畑で）>

ないのですが、映画として興味深く観られる切れ味のよい撮影と編集で、チェルノブイリが今でも「生々しい」問題であることをくつきりと印象付けるものでした。ちなみに、親子 3 代がチェルノブイリ原発で働いている（いた）と紹介されている家族の 2 代目にあたる方は、少し前に私も招かれナタネプロジェクトについて話した、キエフ工科大でのチェルノブイリ・シンポジウムにも参加していた人でした。

2 時間ほどの上映が終わった後、監督がバンドの 4 人を含め画面に登場していた人たちを客席からステージに招き上げ、それぞれの一言があった後、監督及び登場人物らと会場との意見交換がありました。会場からの質問や意見は残念ながらそれほど面白いものはなかったのですが、もともと原子化学を勉強していたという監督は、「フクシマの事故が起こる前にこの映画の編集が終わったのは、全くの偶然だった。原子力そのものは善でも悪でもない。しかし、他の国ではどうかかわからないが、ベルギーでは原発は電気を作るため、あるいはエネルギー問題を解決するためにあるのではなく、金儲けのために運転されている。ただ受身の電力消費者になるのではなく、市民としての責任を受け止めて前向きに考え、行動するという姿勢を提案するために、自分はこの映画を作った。」という趣旨の発言をし、私としては非常に共感できました。

今後、ウクライナだけでなく多くの国でこの映画が観られることを期待したいと思います。

（5 月 25 日）

事務局便り

TV や新聞などの取材や問い合わせなどの対応に追われる毎日…。これでは、本当にやらなければいけないことが進まないじゃないか！と憤慨することもしばしば。もちろん、メディアに取り上げられることも大切なことではありますが…。それと同時に、私もたくさん勉強しなければいけないことがあると痛感しています。事務局には、放射能に関する質問や対策の相談以外にも、「何か協力したい」という問い合わせも。日本中が力を合わせようと必死になっていると感じます。「菜の花プロジェクト」をはじめ、チェル救の活動が今まで以上に注目されているようです。世間の流れに振り落とされないように、でも着実に私たちの活動を広げていかなければいけないですね。(兼松)

放射能測定器を贈ろうキャンペーン

「放射能測定器を被災地の人々に贈ろう」と決定してから、たくさんの方から支援金や応援メッセージをいただきました。4月だけでも、集まった支援金は57万2千円にもなりました。ご寄付くださった皆さま、ありがとうございました。すぐにも測定器を被災地へ送り届けたいのですが、世界的に品薄になっている状況で、ウクライナでも製造に時間がかかっています。

被災地で生活されている方からは、「放射能が不安で仕方がない。どうしたらいいのか？」という問い合わせが多く寄せられています。お子さまがいらっしゃる家庭や、農業を営んでいる方などは、特に心配されていて、どうか対策をたてなければと思います。今求められているのは、確かできめ細かな情報だと思います。ご存知の通り、放射能汚染は一律ではありません。地形や環境の違いで変わるものです。被災地の方が不安に思うのは、「毎日の生活の中で、どれほど被曝するのか？」「自宅の庭はどうなのか？」「通学路はどうなのか？」…そういった事だと思います。これからも、被災地で生活していかなければならない方たちのために、一日も早く測定器を届けるとともに、支援活動を行っていきますので、今後も皆様のご支援をよろしくお願い申し上げます。(兼松)

編集後記

★Cを使い始めて10年以上経つが、ヘッダー、フッターだけがどうしても理解できない。ごめんなさい、今回もやはりマスターできません。本屋でOfficeの攻略本を立ち読みせねば！（佳）

★水省の皆さまに「菜の花プロジェクト」を紹介する機会に恵まれた。25年前から原発事故が教示している事実を議論され、必ず日本の放射能被災者の未来に届きますように。(美)

★ニュース①…首相官邸の4-5階は、米国のエージェントが占領し、原発事故処理の指示を出している。内閣官房参与である平田オリザ氏が、「汚染水の海への放出は、米国の命令だった」と発言。次の日、すぐにその発言を撤回（更に強い圧力が、彼にも降りかかったのであろう）。

ニュース②…あらゆる延命策を謀ってきた米連銀(FRB)のデフォルト(倒産)が、いよいよ目前に迫っている。米国民の年金を横取りしてもなお、8月2日までの命だという。

この2つのニュースは、表裏一体を成している。追いつめられた彼らのターゲットは、7.6兆ドルという日本の資産。実、日本が勇気を出してNOと言えば、世界が生まれ変わるのだ。(J)

お宝ネット 発送先および連絡先

〒399-4511

上伊那郡南箕輪村南原 9955-2 原方「救援・
中部 お宝ネット」宛
TEL 0265-73-9355
Fax 0265-73-9352

〒456-0022 名古屋市熱田区波寄町 20-14

印刷「エープリント」

TEL・FAX (052)871-9473